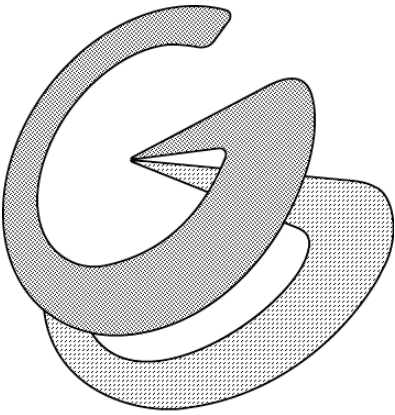


2013年 Gnable



G
n
o
b
l
e

保護者会資料

2013年
10月25日(金)~27日(日)

2013年 秋期 保護者会資料 Contents 一目次

☆ 英語科より	1.グノーブルの考える「英語」	P.1 ~ P.4
	2.受験効果を上げるために	P.5 ~ P.6
	3.大学入試の変化	P.7
	4.今後について	P.8 ~ P.10
☆ 数学科より	1.グノーブルの考える「数学」	P.11
	2.受験効果を上げるために	P.11 ~ P.13
	3.大学入試で求められる力	P.13 ~ P.16
	4.今後について	P.17 ~ P.18
☆ 国語科より	1.グノーブルの考える「国語」	P.19 ~ P.21
	2.受験効果を上げるために	P.21 ~ P.24
	3.大学入試のイメージ	P.24 ~ P.28
	4.今後について	P.29

1. グノーブルの考える「英語」

▼英語を読む

次の文章は、Apple Inc.の創業者、Steve Jobs氏が、2005年6月にスタンフォード大学の卒業式で述べた祝辞の一節です。

Sometimes life hits you in the head with a brick. Don't lose faith. I'm convinced that the only thing that kept me going was that I loved what I did. You've got to find what you love. And that is as true for your work as it is for your lovers. Your work is going to fill a large part of your life, and the only way to be truly satisfied is to do what you believe is great work. And the only way to do great work is to love what you do. If you haven't found it yet, keep looking, and don't settle. As with all matters of the heart, you'll know when you find it. And, like any great relationship, it just gets better and better as the years roll on. So keep looking. Don't settle.

時として人生ではレンガで頭をかち割られるようなことが起きるものです。(しかし)信念を失ってはいけない。私は確信しています、私を駆り立ててくれたのはただ一つ、自分のしていることが大好きだという気持ちだったと。皆さんは自分が好きなものを見つけなければいけない。それは仕事でも恋人でも同じように当てはまります。皆さんはこれから仕事が人生の大きな部分を占めていくでしょうが、自分が本当に心の底から満足を得たいなら進むべき道はただ一つ、自分が素晴らしいと信じる仕事をする事です。そして素晴らしい仕事をしたいなら進むべき道はただ一つ、自分のする仕事が好きであることです。まだ見つからないなら、探し続けること。落ち着いてしまっ
てはいけません。心の問題と一緒に、そういうのは見つかるとピンとくるものです。そして素晴らしい人間関係と同じように、年を重ねるにつれてどんどん良くなっていく。だから探し続けること。落ち着いてしまっ
てはいけません。

英語で文章を書いたり、英語で話をするには**英語を発信する力**が必要ですが、それより前に、英語の文章が読め、英語を聞いて分かるという**受信する力**を身に付けねばなりません。受信とは、読んで聞いて意味が分かるということで、必ずしも和訳することではありません。例えば **This is my house.**のような文であれば、中1の夏を過ぎる頃にもなればイメージが脳裏に浮かび、和訳しなくても意味は分かるはずですが、しかし内容が抽象的になりイメージしづらくなると、日本語に置き換えた方が分かりやすくなります。冒頭の文章は決して抽象度が高いとはいえませんが、高校生になってからグノーブルの門を叩く方のほとんどがこのレベルの英語が読めないのが実情です。以下のように読むのがグノーブル流で、授業の時にもこのように解説します。例として下線部を取り上げます。

I'm convinced 私は確信している(何を?) **that the only thing** 唯一のこと(どんなこと?) **that kept me going** 私を進ませ続ける **was** は...だった(何だった?) **that I loved** 好きだったということ(何を?) **what I did** 私のすることが .

和訳問題の答案としてこのまま解答欄には書けませんが、十分に受信できていることはお分かりいただけると思います。また、英語力が高まるにつれて、区切れ目は少なくなっていくます。

I'm convinced 私は確信している(何を?) **that the only thing that kept me going** 私を進ませ続ける唯一のことは(どんなこと?) **was that I loved what I did** 私のすることが好きだったということ .

要するに「英語を読む」には、以下のようにすれば良いのです。

区切りを見つけて意味を捉え ⇒ 自然に湧いてくる疑問と共に ⇒ 左から右に読んでいく

▼英語を聞く

「読む」際には文末のピリオドに到って「あれ？分からない」と感じたら、文の初めに戻って読み返すことが可能です。しかし、冒頭の一節は『祝辞』として語られたものでした。「英語を聞く」場合には、音は聞こえた後すぐ消えてしまいますから、前に戻ることはできません。英語の語順のまま受信する必要は一層高まります。(ただし、聞く場合には話し手が意味の切れ目で一瞬ポーズを入れますので、意味の切れ目を誤解する可能性は低くなります。もちろん、英語を聴き取る耳が鍛えられていることが前提の話ですが。)

▼文法力と語彙力

さて、ここで問題が2つ生じます。1つは**どうすれば区切りを正しく見つけられるか**ということ、もう1つは**どうすれば区切りの内側の意味が分かるか**ということです。

「区切りを見つけて」と言うのは簡単ですが、英語を読めない人は区切りを正しく見つけられません。例えば先ほどの下線部を

I'm convinced that the only thing that kept me going was that I loved what I did.

のように区切ってしまったらどうでしょうか？正しく受信できる見込みはゼロです。また、convinceの意味を知らなければ、I'm convincedが分かりません。そこで、**文法力と語彙力**が必要になります。

▽文法力＝区切りを見つけて意味のカタマリ同士の関係を把握する力

グノーブルでは、特に中学生の間は**英文法**を重視していますが、それはテストの文法問題に正答するためというよりむしろ、**区切りを見つけて意味のカタマリ同士の関係(＝構文)を把握する力**を培うためです。先ほどの下線部は、文法的には、I'm convinced(sv)に続くthat節が

- [^①that the only thing_(S) (^②that kept me going) was_(V) [^③that I loved [^④what I did]]_(C)]_(O).で
- ①that は接続詞。be convinced の目的語になる[名詞節]を導いている。
 - ②that は関係代名詞。先行詞である that 節内の主語_(S)を修飾する(形容詞節)を導いている。
 - ③that は接続詞。that 節内の動詞_(V)の補語になる[名詞節]を導いている。
 - ④what は関係代名詞。loved の目的語になる[名詞節]を導き、節内で did の目的語になっている。

と説明できますが、英語のネイティブはいちいちこのような分析をしながら読んではいません。それは、私たちが日本語の文法を意識せずに日本語を運用しているのと同じです。

ここで気をつけなければいけないことがあります。それは、**ネイティブは文法を意識していないだけであって、文法をしっかりと身に付けている**ということです。日本語のネイティブであれば、『動く』という動詞は五段活用する動詞だから、『ない』に接続するときには未然形の『動か』という活用形を用いるのだなどと分析することなく、『動かない』は正しいが『動かくない』は間違いだ』と瞬時に判断できますが、それは、文法が身に付いているからできることなのです。

グノーブルでは**英文法**を身に付けるために、中学生テキストの基本例文(＝Sentences for Workout)を全て*GSL化し、*Workoutを通じて運用できるように指導しています。以下の英文は全て Sentences for Workout からの抜粋です>(*GSLについては p4 を、*Workout については p6 をご覧ください。)

- ①that: We are happy **that** you saw your mother again. 【中1E4 ターム(12月)テキストより】
- ②that: The novel **that** was written by the writer won the prize. 【中2夏期講習テキストより】
- ③that: My first impression was **that** he was really funny. 【中3夏期講習テキストより】
- ④what: I don't believe **what** you've just said. 【高1G4 ターム(7月)テキストより】

Workout によって以上の文法事項をしっかりと身に付けている生徒は、I'm convinced that the only thing that kept me going was that I loved what I did.を切れ目を見つげながら、返り読みすることなく、一度で意味を捉えることができます。

(Jobs 氏祝辞中の下線部は、難しい語は1つありませんが、正確に意味を捉えるにはしっかりとした文法力が必要です。読み書きに必要な文法力の有無を確認する指標としてお読みいただけます。)

▽語彙力＝区切り内の意味を捉える力

グノーブルでは中3から大学入試レベルの長文を読み始めます。文法を習得している生徒でも、英文の中に知らない語がたくさん出てきます。語彙の壁にぶつかるわけです。

未知の語があっても文脈から想像することは可能ですし、そうすることは非常に大切です。しかし一文の中に3つも4つも意味の分からない語があれば、想像するにも限界があります。そこで、相談に来る生徒がいます。「先生、単語がわからないから長文が読めません。市販の単語集を買って覚えようと思うのですが、どの単語集がおススメですか？」我々は答えます。「単語集で英単語と日本語訳を一対一対応で暗記するようなことはしないでください。授業で板書した語彙解説を写した『語彙ノート』を作って頻りに目を通し、英語の本文を音読して頭に沁みこませてください。辞書を引いたら、必ず語源の説明を読むようにしてください」と。

漢字の意味を「偏や旁」から類推できるように、英語の語も、『接頭辞＋語根＋接尾辞』の組み合わせで意味をイメージすることができます。例として、**dict** という**語根**と**接頭辞**・**接尾辞**の組み合わせを挙げます。【 】内が意味のイメージ、「 」内が訳語です。

dictate = **dict 言う** + ate...させる ⇒ 【言いつける; 言って書き取らせる】「命令する; 書き取らせる」

> dictator = dictate + or...する人 「独裁者, 権威者; 口述者」

> dictation = dictate + ion 名詞語尾 「指図, 指令; 書き取り」

diction = **dict 言う** + ion 名詞語尾 ⇒ 【言うこと, 言い方】「言葉づかい, 言いまわし」

> dictionary = diction + ary...に関する場所 ⇒ 【言いまわしが収録されている場所】「辞書」

predict = pre 前もって + **dict 言う** ⇒ 【前もって言う】「予言する」

> prediction = predict + ion 名詞語尾 「予言」

contradict = contra 反対に + **dict 言う** ⇒ 【反対を言う】「反論する; 矛盾する」

> contradiction = contradict + ion 名詞語尾 「反論; 矛盾」

> contradictory = contradict + ory 形容詞語尾 (...の性質がある) 「反抗的な; 矛盾した」

先の下線部に出てきた convince であれば、グノーブルの授業ではどの講師も、**接頭辞 con** 全く、すっかり + **語根 vince 征服する** ⇒ 【完全に(精神的に)征服する→思い込ませる】「納得させる, 確信させる」のように板書して、同じ**語根**を含む convict, victory, victor, invincible などにも言及します。

高校生にもなると生徒は電子辞書を持ち歩くようになりますが、電子辞書に入っている英和辞典はほとんどが大修館書店の『ジーニアス』です。『ジーニアス英和辞典 (第4版)』で convince を引くと見出し語と発音記号のすぐ後に、【原義: 完全に(con)征服する(vince) →説得する。[派]→conviction(名)】と説明されています。その兄貴分に当たる『ジーニアス英和大辞典』を引くと、【初 16C; ラテン語 convincere(征服する)より. con(完全に)+vince(征服する). convict と同語源. cf. victory, victor】と、より詳しく解説されています。また、三省堂の『ウィズダム英和辞典』(製本されている辞書を購入すると、無料でウェブ版が利用できます)では、

con·vince^{*} /kənˈvɪns/ [音声] [con(完全に)vince(征服する)] ((名)conviction, (形)convinced, 以下省略...

と出ています。英和辞典を引いたらこれらの説明を読むということを、習慣にしたいものです。

単語集で単語を覚えようとする試みは、泳げない人が、泳ぐのに必要な筋肉をウェイトトレーニングをして鍛えようとするようなものです。効果が全くないとまでは言いませんが、それが泳げるようになることには直接結びつきはしません。泳げるようになるには、泳いでみるしかないのです。泳いでいる(=英語を読んでいる)間に、泳ぐのに必要な筋肉(=語彙力)は自然と身に付いてゆきます。

▼GSL: Gnable Sound Laboratory=グノーブルの音声による演習

グノーブルの授業では英語の仕組みを理解してもらうことをとても大切にしていますが、英語はコトバですから、理解したことを身に付ける訓練をしなければいけません。そのトレーニング(=ワークアウト)をするために、6学年全てに独自開発の音声教材 GSL を導入しています。中学生は文法テキストの Sentences for Workout という基本例文の音声を、高校生は長文の音声を、MP3 形式でウェブサイトから配信しています。

中学生には、Sentences for Workout の基本例文を何度も聴いて音読し、暗誦できるくらい親しんでくるという宿題を全学年・全クラスで出しています。翌週の授業の最後にその中から 3 本の英文を放送して書き取らせ、定着度を確認します。これによって英語の音を聴き取る力がついていくだけでなく、理解できたことが身につく、語彙も自然に増えていきます。

高校生には長文の音声を配信し、授業で解説を聞いたのでしっかりと理解できている長文を繰り返し聴き、何度も音読するように指導しています。音読すると返り読みができないので、英文の意味を前からカタマリごとに捉えていくことができるようになります。このやり方でスラスラ音読できる長文を一つ一つ増やしてゆくと、初見の長文でもかなりのスピードで読めるようになります。

▼GCL: Gnable Creators' Laboratory=発信型の英作演習&添削

英語の発信力を高めるためには、Workout するなどして英語をインプットするだけでなく、少し背伸びをしてアウトプットしてみることがとても役に立ちます。グノーブルは、英語を書くことを重視し、6学年全てで英作文の添削指導をしています。高3になると、授業自体が『読解』と『英作・文法』に分かれ、『英作・文法』の授業内で毎回添削をし、宿題として書いてきた英作文を提出していただき、それも添削していますが、中1～高2でも定期的に英作文を提出していただき、授業内の演習でも英作文を書いていただき、添削指導しています。

2. 受講効果を上げるために

①授業内で

▼中学生の授業の流れ

プリント演習①⇒ 添削②⇒ プリントの解説③⇒ 宿題の解説④⇒ 新単元の導入⑤⇒ お帰り問題⑥

プリント演習①：英作文・和訳・読解・文法等、数枚のプリントを授業の最初に配付します。

添削②：英作文や和訳などの記述式のプリントを回収し、教室で講師が添削をします。

プリントの解説③：添削して生徒一人一人の課題を見極めた上で、的確な解説をします。

宿題の解説④：前回の授業で課したテキストの文法問題や読解問題を解説します。

新単元の導入⑤：カリキュラムにある文法単元を、黒板を使った双方向の授業で説明します。

お帰り問題⑥：Workout してきた基本例文 (Sentences for Workout) の定着度を確認するため、
Dictation^{書き取り}してもらいます。ちゃんと書き取れた方から授業終了です。

▼高校生の授業の流れ

プリント演習①⇒ 添削②⇒ プリントの解説③⇒ 宿題の解説④⇒ お帰り問題⑤

プリント演習①：英作文・和訳・要約・読解・文法等、数枚のプリントを授業の最初に配付します。

添削②：英作文・和訳・要約などの記述式のプリントを回収し、教室で講師が添削をします。

プリントの解説③：添削して生徒一人一人の課題を見極めた上で、的確な解説をします。

宿題の解説④：前回の授業で課した文法テキストと読解テキストの問題を解説します。

お帰り問題⑤：高1までは全クラスで Workout してきた読解テキストの定着度を確認するため、
GSL を放送で流し、Dictation^{書き取り}してもらいます。高2以降は、クラスの状況に応じた問題を出しています。

▼休まない・遅れない

英語の授業は中1から高1までは年間に50回です。受講して伸びる生徒は欠席も遅刻もせずにグノーブルの【宿題⇒授業⇒復習】のサイクルを生活に組み入れている方です。授業を休むと、授業中の緊張感を持った演習ができず、演習後の痒いところに手が届く解説を聞けなくなるだけでなく、その前後の【宿題...復習】の学習サイクル全てを失うことになります。中学生であれば、新単元の導入授業も受けられなくなります。また、部活など理由はあるのですが、遅れてくるのも感心しません。5分でも遅刻するなら、振替授業に出席することをお勧めします。

②授業外で

▼宿題と復習

英語科では、中1から高3の全てのクラスで毎週一定量の宿題を出しています。問題を解いたり、提出する英作文を書いたりといった宿題には、毎週取り組んでいただかなくてはなりません。これをやらずに漫然と授業に参加しているだけでは、英語力の向上は望めません。

宿題をしっかりとやるのは最低限のことで、英語力が伸びるかどうかは **Workout** を継続して行うことにかかっています。生徒の皆さんには繰り返し指導していることですが、確認のため掲載します。


▽中学生の **Workout**: 小ターム毎に配付するテキストの巻頭に記してある以下の勉強方法を、継続して行ってください。それで英語の基礎力は万全になります。

—— 授業で「理解」したことを「身に付ける」ための **Workout**(=トレーニング) ——

- ① ^{聴き込み} **Listening**: 授業で理解した例文を、テキストを見ないで繰り返し聴く(回数は全ての文が完全に聴き取れるまで)。電車の中での時間も利用する。
- ② **Retention / Shadowing**: **Retention** は、英文一本を丸ごと聴き取った後で、まねて発声する。**Shadowing** は、聞こえた英語をすぐさままねて発声する。
- ③ ^{音読} **Reading aloud**: ②の **Workout** で耳に残っている音を利用して、テキストを見ながら一文を音読する。目安は一文につき5回。
- ④ ^{暗誦} **Recitation**: ③の **Workout** の後すぐに、テキストは見ないで声を出して暗誦する。目安は一文につき10回。
- ⑤ ^{書き取り} **Dictation**: ④が終わった後、日を改めて行う。英文一本が流れ終わったら、丸ごと書き取る。書き取ったものをテキストと照合して、つづりの間違いなどがないかを確認する。

以上の **Workout** が終わったあとで、宿題として出されているテキストの問題を解いてください。必要なことが頭に入っているの、スラスラと解けるはずですよ。

▽高校生の **Workout**: 読解問題に関しては、以下の **Workout** を行ってください。

- ① ^{聴き込み} **Listening**: 授業で理解した **GSL** 対応の長文を題材にする。
 1. 英文を見ながら音声を聞き、意味の切れ目を意識して目で英文を追いかける(慣れるまで)。
 2. 英文は見ずに音声を聞く。聞き取れない箇所は、後で英文を見て確認する。全て聞き取れるまで繰り返す。(英語の耳が出来てきたら聞き取れているかの確認に ^{書き取り} **Dictation** をするのもよい。)
 3. 英文は見ずに音声を聞いたそばから ^{まねて声を出す} **Shadowing** する。
(1と2は電車の中などの時間も利用する。3は自宅では大きな声で、電車ではクチパクで。)
- ② ^{音読} **Reading aloud**: 授業で理解した長文を題材にする。気持ちを込めて、声に出して読む。目安は10回。一回毎に右のように印をつけてゆくと励みになります。

音読の効用は、具体的には以下の三点です。

1. 声に出して読むと左から右にしか読んでいけない(=右から左へのいわゆる「返り読み」ができない)ので、英文の情報を「表現の持つ意味の単位で区切って、出てくる順番に頭の中に入れる」ことができるようになる。⇒ **1回読んだだけで分かる力がつく!**
2. 声に出して読むと日本語に置き換えることができないので、英文の意味を英語のまま捉えられるようになる。⇒ **速く読める力がつく!**
3. 「目」だけでなく「口」と「耳」も使っているの、文法・語法・語彙が記憶に残りやすくなる。
⇒ **英語力そのものが向上する!**

3. 大学入試の変化

英語は地球人類の共通語になりました。グローバル化とボーダレス化が進むにつれて、英語の重要性は高まるばかりです。このような状況の中で、大学入試でも様々な改革の動きが出てきました。この項では特に注目すべき2つのことに触れます。

▼文科省の「大学改革実行プラン」

文部科学省は2012年6月、「大学改革実行プラン」を発表しました。2012年度から早速実行を開始し、2017年までには完全実施するという8つの基本的な方向性の中の最初に **1. 大学教育の質的転換、大学入試改革**を掲げています。その中で、『**英語による授業の倍増**』、『**入試におけるTOEFL*・TOEIC**の活用・促進**』を表明しました。

現在でも、**英語による授業**だけで卒業できる学部が複数あります。首都圏では上智大学の国際教養学部、早稲田大学の国際教養学部、法政大学のグローバル教養学部などです。「実行プラン」を受けて、大学での英語による授業は間違いなく増えていくと思われます。

入試への具体的な導入内容については今後議論して行くとのことですが、東京大学の大学院ですで行われているように英語の試験を廃止してTOEFLのスコアで選考を行う、早稲田大学政治経済学部のAO入試のように選考にTOEFLのスコアを用いる、または通常の募集枠とは別にTOEFL枠・TOEIC枠を設ける、のように英語の入試を変更する大学が出てくるのが予想できます。

TOEFL*：**TOEFL**(Test of English as a Foreign Language = 「外国語としての英語のテスト」、トーフル)は、アメリカ合衆国のNPOであるEducational Testing Service(ETS)が主催している外国語としての英語のテストである。その名称の通り非英語圏の出身者のみを対象としており、英語圏の高等教育機関による入学希望者の外国語としての英語力判定のために用いられる。《以上、Wikipediaより》
2005年から導入されたiBT(Internet-Based Testing)では、スコアは0~120で表示されます。**読む・聞く・話す・書く**の全てが試されます。

TOEIC**：**国際コミュニケーション英語能力テスト**(Test of English for International Communication)、通称**TOEIC**(トイーック)は、英語を母語としない者を対象とした、英語によるコミュニケーション能力を検定するための試験である。試験の開発、運営、試験結果の評価は、アメリカ合衆国の非営利団体であるEducational Testing Service(教育試験サービス、ETS)が行っている。《以上、Wikipediaより》
年に8回(1・3・5・6・7・9・10・11月)全国80都市の会場でテストが実施されます。スコアは10~990で5点刻みに表示され、**読む・聞く**が試されます。

▼東大の「グローバルリーダー育成プログラム」

東京大学は教育の国際化を目指して、2013年度から「グローバルリーダー育成プログラム」を実施しています。「東大発グローバルエリート育成の選抜的展開」を目標に掲げた取り組みです。

約3000人の新入生から英語力などを基準に300人程度を選抜し、少人数習熟度別授業を導入。クラス定員を25~30名とし、**授業はすべて英語**で行います。1、2年生全員が所属する教養学部では**英語による科学と教養の授業**を実施し、第2外国語の集中授業も行います。

各学部に分かれる3年生以降は、意欲ある卓越した学生を選抜して、英語によるグローバル教養とグローバルな課題に対する問題解決力の育成を主眼とした部局横断型教育プログラムを実施し、毎年100~200名が海外プログラムに参加。卒業時はTOEFL iBT(Internet-Based Testing)で、100点以上の得点を目標とします。

4. 今後について

①中1

▼冬期講習

全4回の冬期講習では、第1日:動詞と時制①、第2日:動詞と時制②、第3日:助動詞、第4日:比較の順に授業を行います。通常授業を受講している皆さんにとっては、文法単元としては全て復習となりますが、毎回、新しい発展的な事項も学習することになります。また、この講習から授業中に読解問題の演習を始めます。

▼冬期講習以降

F1ターム(1月)の3回は「不定詞入門」で、不定詞の副詞用法(目的と原因)と名詞用法を学びます。F2ターム(2月)の4回は「文型入門」で、品詞と文の要素と5文型を学習します。新中2の春期講習で「現在完了」を導入して時制を一通り学び終えた後、G1ターム(4月)より「準動詞」の本格的な学習が始まります。

我々の見るところでは、英文法がしっかり習得できるかどうかの分水嶺となる大きな山が五つ存在します。いわゆる『臨界期(脳の言語回路が固定化する時期)』以降、外国語として英語を学ぶにあたっては、この五つの山を一つずつ、乗り越えて行かねばなりません。

一つ目の山は「be 動詞の文と一般動詞の文の区別」で、それぞれについて否定文や疑問文・疑問詞を用いた疑問文に変形できる力を身に付けること。この山は中1の間に越えなければいけません。二つ目の山が「準動詞」の山で、不定詞・動名詞・分詞が、動詞の性質を残しつつも、文中では他の品詞の働きをすることをしっかりと理解した上で、自在に使えるレベルまで習熟することが大切です。この山は、基本事項については中2の間に、応用的な分詞構文などについては中3の間に越えたいものです。三つ目の山は接続詞・関係詞を用いた「複文」の山で、ここまでの山々を越えた人は、続く「仮定法」の山と「これらの組み合わせに習熟する」山は、比較的楽に越えることができます。

グノーブルでは中2の夏前に三つ目の山まで一通り導入が終わりますが、生徒が習得するまで時間がかかります。しっかりと身に付くまで、繰り返し復習していただきます。

②中2

▼冬期講習

全4回の冬期講習では、『中学英語の完成』と題して、第1日:動詞とその周辺、第2日:不定詞・動名詞、第3日:分詞・関係代名詞、第4日:比較他、の順に授業を行います。通常授業を受講している皆さんにとっては、単元としては全て復習となりますが、豊富な文法の演習だけでなく、読解の演習も合わせて行います。

▼冬期講習以降

F1ターム(1月)の3回は「関係副詞・前置詞」です。高校範囲の関係副詞を学習し、前置詞を体系立てて扱います。F2タームの(2月)4回は「文型—復習と応用—」です。五文型の復習と、S+V+O+Cの文でCに原形不定詞が来る形まで、全て学習します。また、テキスト(宿題)やプリント(授業内演習)で毎回読解問題を扱います。

③中3

▼冬期講習

αとα1クラスでは、既にセンター試験レベルの読解問題を扱っていますが、この冬期講習は全クラスで『大学受験に向けて高校レベルの読解力養成』と題して、読解に特化した授業を行います。GSLの音声も、長文読解問題の配信となります。グノーブル流の「前から読んでいく」を徹底して行い、大学入試レベルの語彙もたくさん学んでいただきます。

EGGS*のご案内：講習本科では読解しか扱いませんので、特別講座としてこの冬もEGGSを開講します。EGGSは、4日間で英語力の基盤となる英文法を全て学習しようという講座です。365本の基本例文をGSL配信します。

EGGS*: English Grammar Green Session for newcomers「新入生のための基礎英文法講座」。高校生からグノーブルの通常授業受講を希望する方のために2009年度から開講。これからグノーブルで英語を勉強しようという方を対象とする講座ですので、通常授業で英語を受講されている方は受講の必要はありません。また、Fターム(1月～2月)に、EGGS受講者を対象に、EGGSで学んだことの定着を図り、さらに読解力を養成する7回の講座を開講する予定です。EGGSの授業内でご案内します。

▼冬期講習以降

F1ターム(1月)の3回は「複合関係詞・強調・倒置」、F2ターム(2月)の4回は「(高校範囲の)比較表現」です。これで、高校範囲まで文法事項は全て一通り終えて、春期講習から高校生です。

④高1

▼冬期講習

第1日の授業内でテキストを配付します。テキストの単元割はEターム(9月～12月)の復習となる『比較表現・仮定法・接続詞・前置詞』です。毎回、プリント演習⇒添削⇒解説を行います。

EGGS*のご案内：講習本科では扱わない、英文の骨組みを作る文法項目を学ぶため、特別講座としてこの冬もEGGSを開講します。EGGSは、4日間で英語力の基盤となる英文法を全て学習しようという講座です。365本の基本例文をGSL配信します。

EGGS*: English Grammar Green Session for newcomers「新入生のための基礎英文法講座」。高校生からグノーブルの通常授業受講を希望する方のために2009年度から開講。これからグノーブルで英語を勉強しようという方を対象とする講座ですので、通常授業で英語を受講されている方は受講の必要はありません。また、Fターム(1月～2月)に、EGGS受講者を対象に、EGGSで学んだことの定着を図り、さらに読解力を養成する7回の講座を開講する予定です。EGGSの授業内でご案内します。

▼冬期講習以降

F1ターム(1月)の3回は「否定表現」、F2ターム(2月)の4回は「特殊構文」です。発展的な文法事項の学習が続きますが、読解と英作文に軸足を移せるように、文法はなるべく早く習得し終えたいものです。

春期講習からの高2の授業(春期講習から12月のE4タームまで全39回)で、文法単元を更に深めつつもう一度学習します。

少し先の話ですが、高3(高2の冬期講習から【読解】と【作文・文法】各46回)になると、授業が

【読解】と【作文・文法】に別れ、それぞれ2時間行います。どちらの授業でも毎回 Workout すべき GSL を配信し、相当量の宿題(テキスト)と演習(プリント)、添削(要約や英作文)を通じて、万全の英語力を養います。

1. グノーブルの考える「数学」

物事を論理的に考えられ、自分の力で問題を分析し、解決する能力を身につけてもらう

私たちは、常にこのことを考え授業に臨んでいます。

生徒のみなさんに第一志望の大学に合格できる力をつけていただくことはもちろんのこと、大学生、社会人になってからも役に立つものの考え方、見方を身につけていただきたいと考えているからです。

そのために必要な力とは、「基礎力」「表現力」「実践力」の3つです。

① 基礎力: 数学における基礎知識について正しく理解し、計算できる力

問題を解く上で必要となる知識（計算法則、定理、公式）を、ただ丸暗記するだけではなく、「どうしてその計算法則や定理、公式が成り立つのか」の証明や類題演習を通して、しっかり考えることで、「使える知識」として吸収していただくことが大切です。

グノーブルのテキストは単元別に細かく分冊されており、授業を受け復習することで、単元ひとつひとつの知識を確実に定着させることができるように作られています。

さらに、重要単元は繰り返し学習できるようにカリキュラムが組まれています。

② 表現力: 自分の考えを正しく表現できる力

実際の入試で得点するためには、自分の考えをしっかりと採点者に伝える力、つまり表現力が必要です。この表現力を養うためには、答案を第三者にしっかりと添削してもらうことが不可欠です。

グノーブルでは、宿題ノートに自分の考えを表現してもらうことや、授業中の発言や発表、授業中に行う個別添削を通して、早い時期から表現力を養う練習をしていきます。

③ 実践力: 問題を解く上で必要な知識を選択でき、それを組み合わせることができる力

各クラスの「基礎力」「表現力」を見ながら、担当者がクラスのレベルを判断し、最適な問題を選択して出題した応用問題をこなしていただくことで、実践力を養っていきます。

ここで大切なのが「あきらめず、自分の力で何とかしようという姿勢」です。内容的には難しい問題が多いと思いますが、問題が解けたときは自信がつかますし、たとえ問題が解けなかったとしても、いろいろ考えて解説を聴くのと、投げ出してただ解説を聞くのでは数学力において雲泥の差が生まれます。

以上の力を養い定着させる為に、なるべく毎日数学にふれるようにしてください。

2. 受講効果を上げるために

① 授業内で

グノーブルでは、より効果的に数学の力をつけていただくために、基本的には以下のような流れで授業を行っています。

宿題の解説及び前回までの授業内容の復習 → **新単元の導入** → **演習** → **確認**

▼宿題の解説及び前回までの授業内容の復習

クラスや学年によって量は異なりますが、必ず毎回の授業で宿題を出すことにしています（ただし講習前の最終授業や講習中は除く）。宿題の目的は、授業で扱った基本事項が理解できているかの確認と、基本事項を踏まえての応用問題にじっくりと取り組んでいただくことです。解説が必要と思われる内容については、次回授業の導入時に解説を行います。

授業の導入として、宿題の解説や前回授業までの復習をすることによって、授業内容をよりしっかりと定着させることが出来ます。また、頭の準備運動的な意味合いもあります。

▼新単元の導入→演習→確認

新しい内容の解説をし、併せて演習を行います。演習を行うことで、解説した内容が正しく生徒に伝わっているか、また問題を解くにあたってその知識を正しく利用できているかを確認し、分かったつもりではなく、「真の理解」を目指します。

また、演習中に教室を回り、答案を確認することによって、個々の理解度を直接確認し、その理解度によって、その日の重要事項をしっかりと確認できる時間を設けています。

▼「ノートをとる」ということ

授業中にノートをとる際に重要なのは、きれいに書くことではなく、「解説された内容を後で自分が見て分かるように書く」ということです。

ただ板書をまる写しするだけではなく、難しいと感じたところは、口頭で解説された内容をより詳しく記入しておくなどの工夫が必要です。

②授業外で

▼宿題

宿題も授業の一環ではありますが、ご自宅で勉強していただくということで授業外とさせていただきます。

中2までは宿題を提出していただき、チェック及び添削を行っています。宿題をチェックした結果、そのクラスに足りないものが自ずと見えてきます。足りないと思われる部分については、再度授業で時間をとりますので、生徒の皆さんは不足している箇所の復習や確認をすることができます。また、生徒自身も宿題をやることによって、自分に足りない部分を意識した状態で授業を受けることができ、より迅速に弱点を克服できるようになります。

宿題をやる上で大切なのが、分からない問題にも時間をかけて取り組むということです。

分からない問題にあたった時は、授業中にとったノートを参照するなどして、時間の許す限り、じっくりと問題に向き合ってください。しっかりと考えた上で解説を聞くことが重要なのです。

実はテストの時、点数に差がつきやすいのが、難問よりも基本～標準的な問題での失点であり、その問題をしっかりと得点源にできるかどうかは、宿題をきちんとやるかやらないかで大きな差がでるのです。

例えば、中学3年生の α クラスでは、必ず毎回10題程度の大学入試問題を宿題として出しています。すると、1年間で約300題の大学入試問題を解くことになりますので、1回1回の宿題を軽く考えていると、結果として大きな差が生じてしまうことになるのです。

▼きちんと「出席する」ということ

学年が進むにつれて、一度の授業で扱う情報量も飛躍的に増えていきます。一度の欠席が及ぼす影響も、それだけ大きくなります。

まずは、安易に授業を休まないようにしましょう。

学校行事や体調不良などでやむを得ず欠席してしまう場合は、なるべく早い段階で担当講師に相談してください。

▼毎日数学にふれる

部活や学校行事等で忙しい日々を送っていることと思いますが、毎日「数学にふれる」ことを心がけましょう。学校の宿題でも構いません。大切なのは数の感覚、図形の感覚を損なわないことです。過去にとっても優秀な生徒が、短期留学で約1ヶ月間数学から遠ざかっており、帰国後、授業に合流したところ今までしたことがないような計算ミスや間違いを多発したことがあります(もちろん、その後今まで通りしっかり勉強していただきましたので約1ヶ月でもとの状態に戻りました)。ですから、グノーブルの宿題や授業内容の復習も一気に行うのではなく、数日に分けて行うのが効果的です。

3. 大学入試で求められる力

実際の入試で出題される問題には、出題者の意図があります。ここからは、入試の際に求められる数学力について、少し具体的にご説明したいと思います。

▼計算力＝“修正力”

正しい数値を導き出すためには「計算力」が必要です。

数学は科目性質上、前に求めた値を用いて解く問題が多いため1つの計算ミスが大きな失点につながってしまう可能性があります。

計算ミスをしたときに、大抵の生徒は「どうしてミスをしたのだろう」と後悔をします。それでは、数学の得点能力の高い生徒は絶対にミスをしないのでしょうか？

決してそんなことはありません。どんな生徒でも、人間は必ずミスをします。しかし、いわゆる“優秀”な生徒たちほど、自らのミスに対して敏感なのです。彼らは自分のミスの傾向を知っていて、常に多角的に検算をし、実はその都度、ミスをすばやく自己修正しているのです。

つまり、ミスを防ぐのではなく「ミスに気づく力」こそが、正確な計算力の根源にあるのだと言えます。そのためには、解答・解法を一方的に受身の姿勢で見聞きしているだけではだめです。「まず、自分で解いてみる」→「正しい解法を確認し、自分の方法と比較・分析する」という試行錯誤のサイクルの繰り返しが必要です。「解きっぱなし」で、解答をしっかりとチェックしない勉強法は、まさに“百害あって一利なし”なのです。

実際に生徒の答案を添削しているとミスをしやすい生徒とミスをしにくい生徒では、多

くの場合その具体的な計算方法から差があることが見受けられます。ミスをしにくい効果的な計算手法や、自分が出した数値結果を素早く確認する検算手法なども授業を通じて随時紹介していきます。修正力をつけて確実に得点できる力を高めていただきます。

▼数学的論述力＝“正しい表現で相手に伝える”

数学の試験における解答形式は、大別するとセンター試験や一部の私大入試に代表される「マークシート形式」と、国公立大の二次試験や一般入試で用いられる「記述形式」の2種類になります。

「記述形式」では、問題に対する解答を白紙の答案に論述していくことになりますから、数学的に正しい表現で、しかも採点者に伝わるように丁寧に、自らの考えを述べる力が必要です。

この力が受験生はなかなか育ちません。特に数学では、

- ・ 解法を説明する上で省略してはいけない言葉や途中式を書いていない。
- ・ 数値自体はたまたま当たっていても、実は途中の立式は全くの見当違いである。

などと言った、「正しいように見えるが論理的には不正確な答案」が数多く見受けられます。（自分では正しいと思って表現した）答案を第三者がチェックしない限り、このような論理の不備には気づけませんから、「添削」が必要不可欠になります。

しかし、単なる計算問題の数値チェックだけではない、しっかりと記述形式の答案を作り、しかもそれを添削してもらい、という機会は、「学校の定期テスト」や「大手予備校の模擬試験」くらいしかないのが現状でしょう。

一方で、いわゆる「添削教材」では、答案を作成した生徒と添削者とのやりとりは、今度は紙面のみになってしまいます。“減点された理由”について、答案に書かれた赤ペンの文字だけで常に納得できるとは限りません。実際、日々添削のやりとりに関する生徒からの質問はとても多いのです。

このように、「答案を作成する」→「第三者が添削する」機会をマメに設け、さらに不明な点に関しては質問ができる、という環境があってはじめて「数学的論述力」の育成が可能になります。グノーブルでは、授業担当者が添削を行っていますから、同じ生徒の答案を同じ添削者が一定期間担当するので、一人ひとりの生徒の傾向やクセにまで踏み込んだ効果的なアドバイスができますし、全体に多いミスや傾向については、授業を通じて発信することもできるのです。

▼発想力

入試で最も出題頻度が高く、また苦手とする生徒の多い単元として「確率」「整数」「図形」が挙げられます。これらの単元の鍵を握るのは、一般的には「発想力」や「数学的センス」といわれることが多いようです。

それでは「発想力」とは何なのでしょう？

それは主に「着眼力」と「解法設計力」だと考えられます。

・着眼力＝“経験に裏打ちされた感覚”

特に「確率」や「整数問題」「図形問題」では、問題を一読したときに、“着目すべきポイント”がわからず、「数式すら立たない」「見当違いな部分に着目して、全く役に立たない条件式しか立てられなかった」といった“与えられた状況・条件を数式化する”という、いわば“スタート段階”で煮詰まってしまう局面が多いようです。さらに、この類の問題は、スタート段階で有効な手法さえ思いつけば、あっさり解けてしまうことも少なくないので、逆に言えば、“スタート段階で手も足も出なかった”状態で解答を見ると、「この発想にいたる理由がわからない」「自分にはこの手の問題はたぶん解けるようにはならない気がする」となり、その単元自体に苦手意識を持ってしまうことになるのです。

このような“スタート段階”での局面を打破するには、状況を正確に分析し、解法の糸口を見つける力が必要です。

では、この類の問題が得意な生徒は、どうして解けるのでしょうか？彼らは、“限られた試験時間の間に”、しかも“全くのオリジナルの手法を”、唐突に思いついたのでしょうか？

そんなことはまずありえません。突き詰めていくと、過去の類題経験に基づいて、その手法をうまく組み合わせて応用しているに過ぎません。結局のところは、経験値の差なのです。

ただし、ここで重要なのは、経験の質です。

単に問題が解けた／解けなかったという結果のみにこだわるのではなく、「なぜこの解法で解けるのか？／解けないのか？」という具体的な理由にまで踏み込んで理解しなくては、次回以降にその経験を活かすことができません。

いわば“良質な経験”を数多く積むことで、数学的な視野は確実に広がり、知識の有用性が高まります。これこそが「着眼力」「数学的センス」の源なのです。逆に言えば、せっかくの良い問題を、十分な検証をしないことで無駄に通り過ぎてしまうことがとても多く、経験が有効に積み上げられるか否かは、その生徒の価値観によるところが実はとても大きいのです。「なんとなく解けた問題」よりも、「解けなかったが間違えた理由を深く理解した問題」の方が、その問題を通じて得られる「経験値」ははるかに大きいといえます。

これはよく生徒に話すことですが、「センス」という言葉の正しい訳は「感覚」です。何も、「生まれつきの天賦の才」のことを指す言葉ではありません。

例えば、「赤信号は危険だから立ち止まる」というみんなが持ち合わせている「感覚」は、生まれつきの赤ちゃんにはありません。日常生活の経験に基づくものです。「数学的センス」も、このように経験に裏打ちされた“感覚”に過ぎません。

・解法設計力＝“知識を組み合わせる・使いこなす力”

大枠の決まっているセンター試験は別ですが、ほとんどの入試問題を解く際には、「具体的にどの単元の知識を活用すればよいのか？」を自ら選択することになります。

例えば、東大では「図形」に関する問題がよく出題されますが、図形問題に対する解法として利用可能な代表的“ツール”は「ベクトル・三角比・座標設定」が挙げられます。丁寧な参考書では、各ツールを利用した場合の解答例として、複数の解法を紹介しています。同じ解答に行き着くのであれば、当然一番処理が少なくて楽に解ける手法を選ぶべきです。難しい問題になればなるほど、この「解法の選択」の判断が難しいのです。

また、東大や慶應医学部で頻出の「確率漸化式」は、本来「数列」という単元で習得する「漸化式」の知識を「確率」の単元に応用した問題です。このように、複数の単元の知識を融合させて解く問題も数多く出題されます。

これらの問題は、「単なる基本例題・典型問題の丸暗記」では通用しません。

“ベストと思われる解法を選択し、それを組み合わせて解答にいたる道筋を自ら設計する”力が必要になります。

入試では、この能力を試す出題が非常に多く、また一番差がつきやすいのです。

「解法設計力」は、具体的には主に次の2つの要素から構成されます。

- ・各単元の基本知識について、それぞれの「手法の特性」を把握している。
- ・問題の求める最終的な到達地点を常に意識し、「目的意識」を持っている。

基本ツールのインストールを一通り終えてからでないと、「問題を解く際に、どのようにツールを組み合わせるのが効果的か？」という訓練は意味を持ちません。

グノーブルでは高校3年生の1年間を、より複合的で実戦に近い問題を継続的に取り扱っていくことで、この能力の育成に充てています。この最後の1年間の“実戦演習”を、より効果的にするためには、実は基本単元の知識の習得時に「どのように基本ツールをインストールされたか？」がとても大切です。

単に“知っている・覚えている”だけではなく、“使いこなせる”知識に昇華させるには、インストール時に、「手法の特性」（＝知識の有効な使いどころ）を十分意識した上で、知識を整理することが重要なのです。

4. 今後について

①中1

▼冬期講習

全4回の冬期講習では、第1日:代数・一次関数演習、第2日:幾何演習① 相似、第3日:幾何演習② 円、第4日:整数 最大公約数と最小公倍数の順に授業を行います。第4日目に学習する整数以外は、通常授業の復習となります。今まで学習してきた内容がいかにかに定着しているかを試す良い機会となります。

また、「一次関数」と「円と角」の単元を未習の方は、「一次関数」と「円」を各2日間【全4日間】でこの単元の基本から学習する特別講座を設定してあります。積極的なご参加お待ちしております。

▼冬期講習以降

1月～2月(Fターム)では、「一次関数の応用」と「立体図形」を学習していきます。

内容的には考える問題が多くなります。1つの問題にじっくりと向かい合い、ここでしっかりと考える習慣をつけていただきたいと考えています。

中2の春期講習から二次の数学がスタートします。そして、ここから夏期講習までに中学範囲の代数(式の展開・因数分解・平方根・二次方程式)を終わらせます。今まで以上に日々の学習が大切になってきます。確認テスト等を行いながら、確実な定着を目指します。

②中2

▼冬期講習

全4回の冬期講習では、『中学数学の完成』と題して、第1日:代数演習、第2日:関数演習、第3日:幾何演習①、第4日:幾何演習②の順に授業を行います。通常授業を受講している皆さんにとっては、単元としては全て復習となりますが、高校数学を学習する上で必要となる知識の確認、演習を通してその知識の確実な定着をはかっていきます。後半2日間の幾何では数学Aの内容にまで踏み込んだ学習をしていきます。通常授業を受講されていない方で、中学範囲が終了していない方は冬期講習前12月15日(日)に「講習準備講座」を設定しています。この講座で中学範囲の数学の基本事項を学習して本科講座にご参加ください。

▼冬期講習以降

1月～2月(Fターム)「三角形の外心と外接円」、「空間図形の外接球」、「三角形の垂心と傍心」、「確率演習」を行います。内容的には数学Aの内容が中心となります。定理や公式よりも考え方が重要な単元ですからしっかり理解していくことを心がけてください。また、春期講習では「高校数学につながる中学数学」を4日間学習し、4月の通常授業より本格的に数学I Aの学習をスタートします。

③中3

▼冬期講習

全4回の冬期講習では、「数学ⅠAの完成」と題して、第1日：二次関数演習、第2日：三角比演習、第3日：命題と論証演習①、第4日：場合の数・確率演習の順に授業を行います。数学ⅠAの中でも重要度が高い(センター試験にも必ず出題される)4つの単元の完成を目指します。

数学ⅠAが未習または現在学習中の方は、「中3数学特別講座」をお勧めいたします。

この講座は、冬期講習4日間と1月～2月(Fターム)7回(全11回)で、二次関数と三角比を学習します(春期講習で「図形と方程式」を受講していただき、 α 系に入室することが可能です)。

▼冬期講習以降

1月～2月(Fターム)の授業は、数学Ⅱ「図形と方程式」の単元を学習します。特に「図形と方程式」の中でも「軌跡」と「領域」は、毎年苦手とする生徒が多いので、基本事項をしっかりと理解した上で十分な練習が必要となります。高1の1年間で数学ⅡBを一通り学習し、高2より理系、文系に分かれて数学の学習を進めていきます。

尚、高1より(数学ⅠAⅡBを1年間で学習する) β 系のクラスを作る予定です。

④高1

▼冬期講習

▽ α 系

全4回の冬期講習では、第1日：三角関数演習、第2日：指数・対数演習、第3日：平面ベクトル演習、第4日：空間ベクトル演習の順に授業を行います。1、2日目では、数学Ⅱから関数単元を復習し、3、4日目は、数学Bからベクトルを演習します。数学ⅡBでは、必要となる知識の量が増え、複雑になってきます。この講習を通してもう一度確認、整理していきましょう。

▽ β 系

全4回の冬期講習では、「平面ベクトル」の導入授業を行います。基本から応用まで扱いますので、ベクトルを学習したことのない方はもちろん、もう一度しっかり学習したい方にも最適な講座です。

▼冬期講習以降

▽ α 系

1月～2月(Fターム)の授業は「積分法」です。これで数学ⅡBを一通り学習することになります。

春期講習で数学ⅡBの総復習をおこない、4月からの通常授業では理系、文系にわかれ学習を進めていきます。

▽ β 系

1月～2月(Fターム)の授業は「微分法」、「積分法」です。あとは、高2の春期講習で「空間ベクトル」を学習して数学ⅡBを一通り学習することになります。4月からの通常授業では理系、文系にわかれ学習を進めていきます。

(以上本編)

【文責】 1. 2. 4 : 櫻田
3 : 手塚

1. グノーブルの考える「国語」

*方針に変更はないので、このセクションは、原則として昨年と同様の内容です。

▼国語という科目の特徴を理解する

国語という教科は、一言で「国語」と括りづらい科目です。特徴から以下の2種類に分けるべきだと考えています。

①鑑賞の国語

「味わう国語」「感性を磨く国語」とも表現できるでしょう。実際に文章を読み、その奥に秘められたもの、すなわち行間をとらえ、味わう力を養うような国語です。

ただ、この力を養うことは教養の範疇に入り、受験に直接的に役立ちません。逆に「行間を深読みする読み方が文章の読み方なのだ」と勘違いしてしまい、得点力が安定しない状態に向かってしまう恐れもあります。子供の頃本を読むのが大好きで活字に親しんでいたにもかかわらず、中学高校で、特に大学受験において得点が取れない方は、国語について、ここでいう「鑑賞の国語」を国語の全てと考えてしまい、次にあげる②をあまり意識できない場合があるのではないかとというのが自分の意見です。

ただ、特に一貫校に通っている方にとって、中学時代は「鑑賞の国語」に親しむことも大切だと思います。大学受験には直結しないのですが、国語という科目に親しみ、言語による表現を豊かにし、ひいては精神生活を豊かにするためにも「鑑賞の国語」は重要な位置づけにある科目と思います。

②情報処理の国語

いわゆる「受験国語」と表現できます。国語の読解問題において、課題文の前に必ず「次の文章を読み、後の問いに答えなさい」というような表現が、書かれています。これは、「本文に書いてあることだけを根拠にして問題にあたりなさい」、あるいは「本文に根拠を見いだせない問いは決して出しません」というメッセージであると理解すればよいと思います(次の項目でもう一度整理して説明します)。ここで注意すべきことは書かれていないのに「きっとこういうことだろう」「確かこのようなことが書いてあったはずだ」と曖昧に想像力を広げて設問にあたってはならないということです。受験問題を解く上で必要なのは「書かれてあることのみ」を手がかりにして、聞かれていることのみで答えることです。正確な情報処理能力が求められているのです。そうすると上記①の力が十分に備わっている方にとって、実は受験問題において求められていることは「浅い」内容にとどまっていると気づき、物足りなく思えるかもしれません。しかし、そもそも言語とは、書いてあることを正確に読み、それを手がかりに情報処理するという一面がなければなりません。

書かれた文章は筆者の考えの全てが語り尽くされていないとしても、情報処理、すなわち問題を解くときは、書かれている内容を情報の全てと考えておきたいものです。まず、「相手(作問者)が求めているものを、求められているだけ提供する」という、情報処理に徹した答え方が大切なのだということを意識しましょう。

以下、「情報処理の国語」について述べます。

▼「情報処理の国語」を学ぶ上で意識したいこと

さて、では改めて実際にどう学べば良いか、考えてみます。

前の項目にも挙げた内容で、また、過去誰もが見たことのある表現でしょうが、

「次の文章を読み、後の問いに答えなさい」

国語の読解問題冒頭に必ず書かれている内容です。実は、国語の学習に必要なことの全てがここに示されていると思います。表現の前半と後半に分けてその意味を考えてみたいと思います。

「次の文章を読み」

つまり、正確な「文章理解力」です。

決して「次の文章を読まないで」と書かれることはありません(当然です)。よって、文章内容を正確に理解することが前提となります。

この部分でつまずいてしまう原因(つまり何をしなければならないのか)

- ①語彙力の不足。
- ②物事についての常識・背景を理解が蓄積されていない。
- ③文法が定着していない。(古典分野のみ)

以上の3点について力をつけねばなりません。①と②は実感がわきづらい項目ですが一つ一つ積み上げましょう。①の充実のために必要なのはやはり質の高い活字(言語)に触れる量ということになります。②は非常に重要です。「論点の把握」とも表現できますが、評論系の文章を読むときに、論点を知っていること、つまり、現在どのようなことについてどのような意見があるのかは理解を積み重ねておきたいものです。受験における評論文は時事的な内容を踏まえた文章も目立ちます。日々のニュース等に興味を持つという考えも必要です。③について重要なのはコツコツと「やらない」ことだと考えます。時間を区切って一気に全容をつかみ、定着のために実際の文章に触れながらチェックを繰り返し、定着を図る、という形式をお勧めしています。文法学習のみコツコツやっていたのでは、正直無味乾燥なつまらない学習に陥ってしまいます。あくまで実際の文章に触れていき、現段階で何が足りないか、何をすればよいかをチェックしながら学習を進めたいものです。

- まず読んでみる→よくわからなくて困る→あきらめてしまうのをグッとこらえる!
- 何を参照すればよいか、何を調べれば解決するか、過去の学習を踏まえメドを立ててみる
- 確認して、メド通りだったか、違った場合原因はどこだったのかチェックしておく
- 反復する中で定着する

幼児に対していきなり補助輪無しで自転車に乗るのを強要するような乱暴な提案に見えるかもしれませんが、未知の文章を読む上での心構えも養成でき、受験問題に対するときにも役立つと考えます。

「後の問いに答えなさい」

つまり正確な解答能力です(現代文授業において、記述問題では、解答の「構成能力」と表現しています)。

問いに答えなくてもよいという出題は当然ながらあり得ません。必ず、求められていることに答えなければなりません。実際にテストにおいて国語ができるということの核心部分はこちらです。与えられた文字情報(つまり文章)を正確につかむこと、つまり「次の文章を読み」に対応する部分では、文章の「執筆者との対話」が求められています。しかし、この段階で求められているのは「他の人物との対話」です。すなわち「作問者との対話」、そして「採点者との対話」です。よって、作問者が何を求めているかは当然ながら問題文を正確に読めばわかるのです。そこから作問者が示したサインを見抜くことも大切です。たとえば文章中の傍線部について「どういうことか」と聞かれていたらそれは単なる傍線部の解釈でしょう。情報处理的に本文の適切な箇所をチェックしたうえで傍線部を分析的に解釈、換言していけばいいこととなります。しかし「どういうことと考えられるか」と表現してあったら、「本文にそのまま答となる内容は書いていないですよ」と伝えたいのだ、と考えるべきでしょう。良問では高精度でメッセージが示されているものです。見落とさないようにして取り組みましょう。

設問にあたる時常に意識したいことは

①設問趣旨を的確につかむ。

*本文から手がかりを十分に拾う。

②記述問題のためにも表現力を充実させる。

特に、設問趣旨の把握と、手がかりを拾うプロセスを重視したいものです。「次の文章を読み後の問いに答えなさい」と書いてあるのだから、文章中から手がかりが見つからないことはあり得ないのだと考えて取り組みましょう。

ここまで意識していただきたいことを提案してきましたが、実際には苦勞している方が多いのも事実です。そのような個々の現状を把握して具体的なアドバイスを、授業内、さらに答案の添削等でできればと思っています。

2. 受講効果を上げるために

まず、受講の前段階についての提案です。国語受講を考えていない方、また、特に中学生の方にも申し上げたいと思います。受験には直結しないかも知れませんが「国語に親しむ」ことをお勧めします。具体的にいうとやはり「読書」です。元プロ野球監督の野村克也氏の名言として、**「読書は博学なる人をつくり、会話は機敏なる人をつくり、筆記は確実なる人をつくる」**という言葉があるそうですが、全ての前提に、インプット量、さらに考察習慣の蓄積が必要となります。個人的に、自分は中学生時代、「賢い人間」になりたくて、しかしどうすればよいか分からず、「とりあえず過去の賢人が読んだと思われる本を読もう！」と考え当時手に入った「新潮文庫の100冊」のパンフレットにあった「歴代のロングセラー」を全て読もうとしたことを記憶しています。確か、1位は太宰治「人間失格」、2位は夏目漱石「こころ」、3位は「老人と海」でした。役に立ったかどうか分かりませんが、「こういう表現があるのか！」「こういう価値観の人物がいたのか！」と、夏目漱石や太宰治の小説家の作品を通して思いを巡らせたことなどがあり、よい思い出でもあり財産になっていると思います。余談ですが、太宰治などは、その内容に共感しうる「適切な」年齢があると思います。

大学生で初めて読むなどではあまり価値がない気もします。逆に中学生時代につまらなく感じた「ころ」を高校で改めて読み、そのおもしろさに感動したという経験が自分にはあります。各自にとって「その年齢でなければ価値がない」というタイミングがあるようです。これは重要な、かけがえのない体験だと思います。

近年、ネット社会となり簡単に手軽に情報が手に入り、じっくりと腰を据えて長めの文章を読むこと、辞書を自分で引いて調べること、さらに言うところを書くことさえ少なくなっていく傾向にあります。シャープペンシルや鉛筆を持って実際に字(特に漢字)を書くという行為は、実は高校を卒業したら激減するでしょう。「じっくり取り組む」という行為は中学高校の時におこなう貴重な体験です。大切にしてほしいと思います。

また、ついではなげざしお勧めしたいのは、「名作の暗誦」です。百人一首、枕草子、源氏物語、方丈記、徒然草、奥の細道、また森鷗外「舞姫」、中島敦「山月記」、夏目漱石「草枕」などの冒頭部分などを音でつかみましょ。過去、親しくしていた教材スタッフは「山月記」の名文ぶりに感動して、あの作品を全文(!)暗誦していたそうです(参考までに、その方は関西出身の東大理系学生でした)。そのように内容を味わえなくてもまずリズム感を身につけましょ。深い内容上の理解は後付けでも構いません。この言語特有のリズム感を、名作を通して体になじませておくことは受験勉強を超えた教養として将来の財産になると思います。やらなくてもいいことに取り組み、享受できることが、グローバルに通われている大多数、一貫校に通っている最大のメリットだと思います。

①授業内で

▼古文の授業の流れ

前回の「全訳演習」(プリント)、返却と解説① → 古文単語学習② → 宿題の解説③ → 全訳演習④

*過去扱った内容を定着度確認のためそのまま出題する「復習問題」も頻繁にあり。

・前回の「全訳演習」(プリント)、返却と解説①

得点をつけて返却します。解説では原則として黒板に全文を書き出し、ポイント部分を全て色分けして(単語は黄色、助動詞は赤色、敬語は青色など全て事前に案内したルールで色をういます)、一語一語を疎かにしない緻密な解釈を提案します。また、ただ解説するだけではなく、どうすれば正しい解釈になったかを各自に考えてもらうように「説明し尽くさず」、どこにポイントがあると思うか考えてもらいつつ解説を加えていきます、約45分~60分くらいかけます。

・古文単語学習②

「古文単語帳」を使用し、毎週7つずつをメドに解説していきます。どういう漢字をあてるか、どういう語源イメージが存在するかを解説し、丸覚えにならないように工夫しています。また、今まで読んだ文章のどこで出てきたかを聞く機会が後になるにつれて増えていきます。学習効果を実感してもらいたい部分です。

・宿題の解説③

基本的には15分程度で終わられる程度の全訳が宿題です。授業ではやっているかをチェックするだけの内容にならないようにしています。古文は、どこかで調べれば宿題をやった体裁が整っ

てしまうことが考えられます。また解決法として辞書を引くことも重要ですが、調べると該当部分がそのまま出ていることもあるでしょう。それを「ラッキー」ととらえるか、意味がないと考えるかが重要です。原則として辞書は用いずに取り組み、最後の最後で取り組む中で考えた自分のメドは正しかったか確認する程度にとどめるべきです。授業ではそのような姿勢を育むためにも「どこがよく分からなかったか」、「分からない理由は何だと思ったか」を聞き、確認しながら解説するようにしています。また、新しい項目の解説や今後の学習に役立つ知識解説なども、ここで扱うことが多くなります。

・全訳演習^④

約15分程度です。提出してもらって授業は終了です。前期は助動詞活用表や過去のノートの参照も許容します。どうすれば解決するか考えながら取り組む姿勢を確立してほしいところです。提出時、「どうしてこんなにできないのだろう」と悩み落ち込む体験も重要だと思います。

なお10月中旬から、上記の②以外で、「 α クラス」と、「 α 1クラス」「 $\alpha\alpha$ 1クラス(合同クラス)」は別内容を扱っています。例を挙げると「月 α クラス」から「水 $\alpha\alpha$ 1クラス」へ振替すると扱っている内容が大きく異なります。振替をする場合はご注意ください。

▼毎回出席する重要性

授業は常に継続性を重視し、過去のどの内容と関連するか聞き続けることになります。よって欠席などで空白部分があると、疎外感を感じるようになってしまいます。出席し続けてください。なお、几帳面な性格の方は、やむを得ない空白部分(欠席)が気になるでしょう。ただ、数回重なってしまうとカバーするのは気が重いです。休んだ部分のプリントなどを提出することなども重要な姿勢だと思いますが、できなくても「これ以上空白を作らない」という姿勢で改めて出席し続けましょう。授業は反復の連続です。人にとって2回目が自分にとって1回目となってしまうと、その後、人にとって5回目となる時は、4回目となるわけで、致命的な差とはならないと前向きに考えましょう。ただし、春期講習、夏期講習など空白となると授業効果が皆無に等しくなる授業もありますので、出席の大切さは、もちろんいうまでもありません。

②授業外で

▼宿題と復習

既に提案したように、宿題はただやればよいという姿勢ではなく、次の授業への問題意識を持つために取り組んでください。

また、一番重要なのは3分程度の復習です。授業内で、プリントの整理の仕方も受講生には提案しますが、整理しつつその時「何も書いてないプリント」を眺めるだけで十分です。1回音読すればさらによいと思いますが、眺める中で、授業で自分が分かっていたこと、分かっていたいなかったこと、さらに当てられて答えられたところなど、授業を思い出す機会にします。そして、「あれっ、この部分は何だったっけ」と感じたら、書き込み入りのプリントの方を見れば解決します。この積み重ねがいかに重要か進めば進むほど気づくこととなります。繰り返しますが、「3分程度、何も書いていないプリントを眺める」という習慣を身につけないと受講価値は半減しますので注意しましょう。

先日(9月1回目の授業)で、クラス分けテストを実施し、70点以上の方は「αクラス受講可能」としましたが、取れたか取れなかったかを分けたのは、能力自体よりも、数分程度今まで扱った内容を見直す習慣があったか否かによると考えます。授業内で、過去扱った内容を復習として話すことは頻繁にあるのですが、定着している方は、「あれが来るな!」と、解説内容(場合によっては「ネタ」)を想定できている表情をなさいます。時として解説の途中で「さあ!私は今から何を書くでしょう?」と聞くことさえあるのですが「この人は答えてくれるだろう」と感じている方にあてるとほぼ間違いなく「今から」黒板に書く内容を言い当てて下さいます。以心伝心が成立している授業です。年度の後半では頻繁におこなう楽しい授業の一コマです。一度扱った内容を「受けっぱなし」で流すのではなくイメージを残し定着させるためにも、たった数分で十分なので習慣づけてください。なおこれは保護者の方に伝えるだけでは無意味であり、授業で直接伝え続けます。

3. 大学入試のイメージ

将来の大学受験では、どうということが求められているかを簡単に解説します。

なお、どの局面でも共通することは、「行間を読む読解力」「深い考察力」「豊かな語彙力」を駆使しすぎることは危険だということです。本当に国語力のある方は、ある意味、受験国語の「浅さ」を理解できているものです。ただ、「浅い」と表現しましたが、正確に文章を理解し、正確に相手(採点者)が求めているものを想定し、正確に伝達することは、より深い考察、展開の大前提になります。受験国語は、実は、将来大学で高度な研究活動に進めるための大前提たる力を身に付けているかを試す機会なのかもしれません。

授業でも繰り返し提示する内容ですが、

「作問者の意図」を見抜く

「採点者の想定」を見抜く

以上2点が特に重要だと考えます。

▼例題によるイメージ作り

実際の受験問題で簡単に解説します。将来の受験ではどのようなことが求められるのかイメージしてください。なお、東大の問題とセンター試験を題材にします。実際に部分的抜粋では全ては伝わらないでしょうが、イメージすることが重要なのでご了承ください。なお、今回は例を示しませんが、早稲田、上智などの私大の問題は、知っていれば正解を得られる知識問題(しかもかなり難しいものが目立つ)、古典ではこまかな文法問題が多いことを一言示しておきます。

東大2011年の現代文より

豊かさの内容が固定化された概念によって捉えられると、その概念によって空間の再編が行われる。たとえば「親水護岸」は水に親しむという行為を可能にするように再編された空間であるから、空間を豊かにすることであるように思われるが、その空間は「水辺に下りる」「水辺を歩く」というコンセプトを実現する空間にすぎない。そこでひとは、たしかに水辺に下りること、水辺を歩くことはできるが、それ以外のことをする可能性は排除されてしまう。この排除は川という本来自然のものが概念という人工のものによって置換されるということを意味している。それは本来身体空間であるべきものが概念空間によって置換されている事態と捉えることができる。

問「本来身体空間であるべきものが概念空間によって置換されている事態」とはどういうことか、説明せよ。

* 対応法のイメージ

「とにかく語り尽くそう」と考えないことです。東大は字数制限のある問題はほぼありませんが、解答欄のスペースでおおまかな字数を指定してあります。その中に「採点者の想定」を考えつつ書きます。「はめ込んでいく」という発想のほうがよいかもかもしれません。この問題は「身体空間」と「概念空間」の適切な解釈が中心ですので、「本来……であるものが……によって置き換えられている事態ということ」という解答構成が原則になります。あとは、「……」の部分の適切にまとめればよいのです。東大は特にこのような「採点者の想定」が見抜きやすい問題が目立ちます。その枠組みにあわせてまとめるのが「どういうことか」という換言問題の「作問者の意図」であると考えましょう。ここに類まれなる言語能力やセンスは一切不要です。

東大2011年の現代文(文系問題)より

こうした奔放な語り口に惹き込まれつつ、私のなかに奇妙な違和感が湧いてくる。丸腰で熊の棲む山に入ることはきわめて危険なことであり、すなわち「無鉄砲」であることは、まさに字義通り、後先を考えない「向こう見ず」で「強引」な行為であるはずだった。

問「私のなかに奇妙な違和感が湧いてくる」とあるが、どういうことか、説明せよ。

* 対応法のイメージ

北海道で、アイヌの長老がヒグマと狩る時は「無鉄砲」、すなわち丸腰で対するべきだと語ったのを聞いた体験を筆者が示している文章です。この換言問題で最大のポイントはどこでしょうか。「違和感」を修飾する「奇妙な」です。そうすると単なる否定的ニュアンスの「違和感」に加わるただし書きの表現を踏まえ、単なる否定的内容にとどまらない「違和感」部分の解釈が必要です。構成自体は「筆者は『無鉄砲』という言葉の用い方に……を感じているということ」となるでしょう。この……部分に肯定的を入れつつ書くとよいと気づきたいところです。

東大2011年の現代文(文系問題)より

「無鉄砲」という日本語表現は、それじたいは「無点法」ないし「無手法」(方法無しに、手法を持たずに)という用語の音変化とされる一種の当て字である。だがこの用語は、近代日本文学の聖典ともいべき夏目漱石の『坊っちゃん』冒頭のあまりにも良く知られた「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりして居る」という一節によって、その意味論を封鎖されてきた。

問「その意味論を封鎖されてきた」とあるが、どういうことか、説明せよ。

* 対応法のイメージ

前と同じ文章、問題から引用しました。直前を踏まえ、まず「何によってこうなるのか」に該当する、

夏目漱石についての言及から始めるべきです。そして、「その意味論」の解釈、結びは「封鎖されてきた」に該当する表現となります。よって、「夏目漱石が『坊っちゃん』で用いた表現により、……について考察する余地が失われてしまったということ」という構成が原則になります。

以上、現代文を3題ほど例にあげましたが、適切な表現力、語彙力はある程度必要ですが、展開力などは、必要ないことを理解しておきたいところです。

次に古典問題について示します。

東大2009年の古文より

かくて、いとおもしろく遊びののしる。仲頼、^{びきうぶ}屏風ふたつがはさまより、^{みす}御簾のうちを見入るれば、

問 傍線部を現代語訳せよ。

* 提案する対応法

東大の古典は簡単だという考え方があります。実際、文章の難易度自体はそれほど高くありません。しかしそれは、東大は、古文の知識をいかに蓄積したかを求めているのではなく、いかに適切な対応ができるかを見るところに中心があるからだと考えます。ここで示した問題ですが、管絃を楽しむという意味の「遊ぶ」、大騒ぎするという意味の「ののしる」という基本単語を知っているか試すだけの問題とは到底思えません。東大は短めの現代語訳問題で、このような基本的重要な単語を含む訳を求める場合が比較的多いのですが、安易に対応しないように心がけたいところです。この場合は「皆でにぎやかに管絃を楽しむ(管絃に興じる)」などとするべきです。少しの違いですが、この工夫を求めていると考えます。「音楽を演奏して大騒ぎする」という模範解答を示している問題集さえありますが、そもそも情景を想像すると意味不明といえます。

東大2007年の古文より

「さること侍りき。ただのことにはあらず。笛に秘曲を伝へて、その曲を千遍吹きし時、為隆参りてことを奏しき。今二、三遍になりたれば、吹き果てて言はんと思ひしほどに、尋ねしかば、まかり出でにき。それをさ申しける、いとはづかしきことなり」

問「尋ねしかば、まかり出でにき」を、だれの行為かがわかるように、ことばを補って現代語訳せよ。

* 対応法のイメージ

典型的な東大古典の設問です。単語知識などではなく適切に情報処理して、相手に伝えきれるかを試しています。他にも「誰のどういう状態か」のようにそもそもの解答構成をしてある問題も目立ちます。さて、この部分、傍線部自体のみ訳すと「探したところ、退出してしまっていた」となります。「尋ね」が尋ねるではなく探すという意味であることや、「…しかば」の訳し方、さらに文末「…にき」という助動詞の訳出も必要でしょうが、傍線部の内容を誤解なく伝えるには、「誰が誰を探したか」「誰が退出したか」を示すべきで、そこが採点の中心だと理解できると思います(ただし、上に示した他の文法事項などもスキなく示す必要もあります)。

なお、参考までに申し上げます。この部分は登場人物の会話部分となっている部分なのです。そこで、冒頭の訳で主語を「私が」とすべきだが固有名詞ではないので誤解を与えるおそれがあります。そこで、この部分の話者は堀河天皇なのですが、「堀河天皇は」と書くのも不自然だと感じたのか、それらを併せて「わたくし、堀河天皇が…」とあえて示し、さらに文末も会話調に「…してしまっただのです」と結ぶ答案さえ、長い期間受講して下さっている生徒さんの答案では見られました。そういう答案作りを常々提案してはいるのですが改めて言わなくても配慮あるスキのない答案作りができていく方が多く感心します。必須採点要素だとは思いませんが、正確に伝えようとしている姿勢は確実に伝わるものです。

東大漢文の設問表現より

「平易な現代語に訳せ」「わかりやすく現代語訳せよ」

* 対応法のイメージ

東大漢文では「平易な」という表現を用いる場合が目立ちます。2012年は「わかりやすく現代語訳せよ」という表現に変わっていて個人的に採点方針の変更があるのか考えさせました。2013年はまた「平易な現代語に訳せ」と従来の表現に戻っていたのですが、2012年は何だったのか悩むところです。考えすぎでしょうがそこまでこだわる姿勢は必要だというのが信念です。同じような内容で話は逸れますが、一橋大学は毎年 200 字以内でまとめる問題を出すのですが、「右の文章を要約しなさい」と表記する年と、「右の文章の要旨をまとめなさい」と表記する年があります。意図は何か気になります。ただ、この場合、字数は同じということもあり、深い意図はないのだろうと個人的に結論づけています。言いたいことは、そこまでこだわり、「作問者の意図」を徹底的に見抜こうとする姿勢を持ちたいということです。漢文の話に戻ります。ここに示されている「作問者の意図」は何か、やはり考えてみるべきです。漢文は、型にはまった表現が目立ちますが、例えば「……ですら……なのである。ましてや……はなおさらだ」「どうして……であろうか。いや……ではない」というような構文パターンにはめて訳すのではなく、ある程度自然な日本語として書くことが求められているのではないかと考え、工夫するべきです。「平易な現代語」という文言に「直訳は歓迎していない」という出問者の意図が現れていると考えるべきです。「どうして……であろうか。いや……ではない」という反語表現を示すべき部分に傍線が引かれていて現代語訳が求められている場合、もし解答欄が小さめだったら「……などあるわけがない」と書いて問題はないと考えます。実は東大の採点ではそう表現していることを求めているのではないかとさえ考えます、常にちょっとした表現や字数指定から「作問者の意図」を探る姿勢を持ちたいものです。

次にセンター試験の特徴を示すために古文文法問題を2題示します。

センター試験2012年の古文・文法問題より

- a 「…我よくこととり申さん」と、うけがはれたるに、うれしきことたとへんものなし。…
- b 先の宮人、この人の二なき志をめで給ひて、琴を送られしが、絃一筋ある琴なりき。…
- c 二筋に落つる涙も一筋の玉の小琴にかけにけるかも…

d その形面白かりければ、くしげの箱なる元結を一筋ひきかけて、調べ給へるよりはじまりて、…

問 波線部 a～d の文法的説明の組合せとして正しいものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① a 受身の助動詞 b 断定の助動詞 c 完了の助動詞 d 動詞の活用語尾
- ② a 尊敬の助動詞 b 伝聞の助動詞 c 格助詞 d 動詞の活用語尾
- ③ a 受身の助動詞 b 伝聞の助動詞 c 断定の助動詞 d 完了の助動詞
- ④ a 尊敬の助動詞 b 断定の助動詞 c 格助詞 d 動詞の活用語尾
- ⑤ a 尊敬の助動詞 b 断定の助動詞 c 完了の助動詞 d 完了の助動詞

東大2008年の古文・文法問題より

- a 「我には、定まれるる夫侍り。…」…
- b 「いかなる人にや」と尋ぬれば、…
- c 角左衛門、感激にたへず、送りし者に右のあらまし語り、…

問 波線部 a～c の文法的説明として正しい組合せを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① a 自発の助動詞 b 格助詞 c 過去の助動詞
- ② a 自発の助動詞 b 断定の助動詞 c サ行変格活用の動詞
- ③ a 下二段活用の動詞の一部 b 格助詞 c サ行変格活用の動詞
- ④ a 完了の助動詞 b 断定の助動詞 c サ行変格活用の動詞
- ⑤ a 完了の助動詞 b 断定の助動詞 c 過去の助動詞

* 対応法のイメージ

まずセンター試験とは、特に情報処理に特化した試験です。他にもまして、時間をかけて深く考察することは決して求められていない試験であることを理解しておきましょう。センターは全体としても「読む量」が多く、じっくり読んでいる時間はありません。そこに「作問者の意図」を読み取るべきです。つまり、「数段落後などの遠くの手がかりが必要な場合はほとんどない。傍線部と、その直前直後のみを手がかりに『作業的に』答を出せるように作られている」こと知っておきましょう。そして、量が多いということは「読むスピードを上げる」か「読む量を減らす」のいずれかとなりますが、後者であることを理解しておきましょう。選択肢は原則、各選択肢が同じ構成で作られています。まず、前半のみを読み、そこで半分以下に絞り、その選択肢のみ後半を読むことを想定して作問されています。実際、前半部分のみで決まる問題もかなりの数にのぼるのが現実です。ここで示した文法問題でも、自分にとって確実と思えるものから攻めればいいのです。例えば2012年は、Cが「完了」を表すと分かれば、早々に2択になりますし、2008年もCが「過去」を表すと分かれば、やはり2択になります。全てが完璧に分からなくても、いくつか分かれば解決するように作られています。センターは読解問題も含めて、このように作られている設問が中心です。

小説や、古文で言葉の意味を聞く問題があるのですが、この場合も、深く考えるのではなく辞書的意味を原則に作業的に解いて正解を得られる場合が目立つということを知っておきましょう。

4. 今後について

①高1(古文)

▼冬期講習

平常授業受講生のみを対象にした講座です。新たに受講を希望する方は原則としてお断りしています。新たに検討される場合は、高2で春期から受講することをお勧めします。なお、「αクラス」は別内容で進めますので、振替はご注意ください。

▼冬期講習以降

αクラスは10月から移行している内容ですが、全クラスにおいて、「古文を読む」トレーニング中心から、センター試験など実際の受験問題を用いて実戦力、すなわち「得点に結びつく答の出し方」を養うために何が必要かを強調する内容が中心になります。

②高2以降のスケジュール

大前提は、国語という科目については高3から始めるのは遅いということです。高3まで国語が手つかずとなっているなら、場合によっては国語以外でカバーすることを目指し、国語は「そこそこにとどめた」方がよいのかもしれませんが。高3は社会や理科に時間をかける必要があります。グノーブルでは、高3で「東大国語」「私大国語」「小論文」を開講していますが、「東大国語」「私大国語」は体系立てた解説をせず、手法が確立できているかチェックする形式です。下の学年での学習を前提に授業を進めますので、高1で古文を受講された方は、高2で現代文を受講して、現代文の答案の作り方を磨いてほしいと思います。

[MEMO]

[MEMO]

[MEMO]



www.gnoble.co.jp

大学受験グローバル事務局【新宿本館・受付】

〒151-0053 渋谷区代々木2-8-3 新宿GSビル1F

TEL 03-5371-5487 FAX 03-5371-5488